

プラザ
おでって & 啄木・賢治青春館

Plaza Odette

発行 / (財) 盛岡観光コンベンション協会 発行 2012/11/01

盛岡市庁舎

V127

詩人として賢治を超えた村上昭夫

只今、青春館で「動物哀歌・村上昭夫展」を開催している。地元でも彼の名を知る人は少ないが、全国では詩人の方々の評価が実に高い。彼をこの世に押し出した村野四郎氏は、この詩集を「啄木より賢治より、もっと心霊的で、しかも造形的な文学を見る」と評した。現代詩作家の荒川洋治氏は『雁の声』を「いい詩だ。どこまでも心に残る詩だ。このような詩は誰かが書くべきだった。」とまで評している。

それは読み進んでいくと、不思議な感覚に襲われるのである。熱にうなされている時に感じる宇宙感覚のようなもの。時空を超え浮遊して、自分がさまよい始めるのである。

実は、この動物哀歌を私は三十七年前に読んでいた。その時は、ソングライターとして、歌になる詩はないかと探し当て、「ぼくという旅人」に曲をつけ、歌った。彼の造形性についてリフレイン、韻、リズム、展開などに興味を持った。今回改めて読み返し、彼の凄さに気づかされた。

この企画展を準備するため、多くの評論を読んだ。彼は肺病を患っていたこともあり、孤高の詩人と称されているが、実は多くの文芸人に囲まれ、愛されていた。盛岡は美術のみならず、文学をたしなむ人々も多い。その中で、もまれ優れた人物を配している。昭夫はよく賢治と比較されるが、こうしてみると賢治の方がより孤高であった。何せあれほど優れた作品を書きながら、生きている間に全く評価されなかったのだから。ともあれ、詩人として賢治を超えると言われる昭夫を、ぼくらはもっと顕彰してはどうであろう。